

京都外国語大学ラテンアメリカ研究所主催 第19回ラテンアメリカ教養講座  
いま「ラ米映画」が面白い  
～映画でひも解くラテンアメリカの世界～

日時：2021年6月1日より毎週火曜日（全5回）18：00～19：00

参加方法：Zoomによるオンライン形式

後援：京都ラテンアメリカ文化協会

※事前申し込み制・参加費無料

ラテンアメリカの映画制作は長い歴史を持ち、20世紀前半以来、世界で高く評価されてきました。昨今ハリウッドではアルフォンソ・キュアロン、ギジェルモ・デル・トロなどのメキシコ人映画監督の活躍が目覚ましく、注目を浴びています。また、キューバ、グアテマラ、ブラジル、チリなどのドキュメンタリー、社会派の映画、コメディ等多彩な映画を通して垣間見ることのできる、制作された国特有の人々の暮らし、その背後にある歴史的、政治・社会的現実の重層性は、私たち日本人にとって全く異質なものであり、だからこそ面白く、魅力的に感じるのかもしれない。

講座では「ラ米映画」を作品として鑑賞していただくのではなく、現代ラテンアメリカ諸国における映画制作の動向、いくつかの映画のテーマと内容、そこから見えてくる監督たちの問題意識と現実社会のありさまなどについて探っていきます。

6月1日（火）

**「ラテンアメリカ映画 ここだけの話」政治と社会を反映し進化する映画の現場**

比嘉世津子（Action Inc.代表）

日本で観る機会が少ないラテンアメリカ映画ですが、今では、未公開映画でもNetflixやAmazonで日本語字幕付きで見られるようになり、映画業界全体の要になっています。単なるエンターテインメント映画では飽き足らない方々に、邦画やハリウッド映画との違いから、根底をなす歴史と文化の共通点、代表的な作品の制作秘話を交えながら、ラテンアメリカ映画の独自性と面白さを探ります。

6月8日（火）

**ネット配信普及でアクセスしやすくなったメキシコ・中米映画**

丸谷雄一郎（東京経済大学経営学部教授）

メキシコ・中米映画はミニシアターからDVDリリースというルートで紹介されてきましたが、日本ではアクセスしにくい状況にありました。しかし、Netflixなどのネット配信普及はこれを格段に容易にし、映画制作環境も激変させています。講演ではNetflix制作作品ながらベネチア映画祭金獅子賞とアカデミー賞外国語映画賞をダブル受賞した『ローマ』など、近年のメキシコ・中米映画事情並びにその作品の背景についてご紹介いたします。

6月15日（火）

**「ラテンビート映画祭」を通して見たラテンアメリカ**

アルベルト・カレロ（ラテンビート映画祭プロデューサー）

最新のラテンアメリカ映画を日本で紹介する「ラテンビート映画祭」は、2004年から毎年開催されてきました。この映画祭が企画されたいきさつと、17年の軌跡をたどりながら、昨今話題のチリ・コロンビアの映画について紹介します。また、ラテンアメリカで制作された映画の変遷を、その背景にある社会的・文化的変化にも触れつつ、ラテンアメリカ映画の今後についてもお話しします。

6月22日（火）

**映画のなかの先住民と社会における先住民**

兒島峰（神奈川大学准教授）

ボリビアでは、先住民が置かれている貧困や差別を告発する映画が1960年代から制作されてきました。時代は変わり、先住民が国政を動かすほどの社会的影響力をもつようになると、映画の中の先住民はどのように描かれるのでしょうか。映画における先住民像の変遷から、先住民の社会的地位の変化について考えます。

6月29日（火）

**ブラジル映画が魅せるフィクションとノンフィクションの間（はざま）**

住田育法（京都外国語大学教授）

義賊的盗賊（カンガセイロ）が登場する伝統的なブラジル映画では、西部劇や時代劇を観るときのわくわくするような物語の展開に加えて、北東部の奥地（セルタン）の風景やフォルクローレを楽しむことができます。ヴァルテル・サーレス監督の名画『セントラル・ステーション』も奥地がテーマでした。そして今、第72回カンヌ国際映画祭で奥地の問題を描いたブラジル映画『バクラウ』が「審査員賞」に輝きました。奥地を好むブラジル映画の魅力とその特別な秘密に迫ります。

●お問い合わせ●

京都外国語大学ラテンアメリカ研究所

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

TEL: 075-312-3388 E-mail: ielak@kufs.ac.jp

<http://www.kufs.ac.jp/ielak/index.html>